

「環境の循環」から考える

アートの現場から

ACAC通信

降り積もっていた雪も融けはじめ、日が長くなり春の訪れを感じています。新型コロナウイルス感染症の影響が大きい一年ではありましたが、国際芸術センター青森（ACAC）のある青森公立大学でも先日卒業式が行われ、別れと新たな旅立ちの季節がめぐっています。

津波被災地に夜間工事現場の姿をした野外スケートパークをつくったり、防潮堤をまたいで「壁」にまつわる表現を集めた仮設美術館「MOWA」をつくり出しました。今回はEHSが公共施設で行う初の展覧会となります。

本展覧会のためにアーティストたちは竜飛岬、青函

トンネルを中心とした調査

を行いました。トンネルの

斜坑や約24年に及んだ工事

（構想期間も含めると約42

年間）の土砂埋立地などを

見学するなかで、トンネル

が実用化されてからもずっと

と1分間に約20リットルも

の湧水が圧によって汲み上

げられ、排出され続けている

の事実を知りました。自然

災害等の課題解決や、環境

の創造・維持発展のために

整備を行う土木工事です

が、建造物をつくったら終

わりなのではなく、維持し

ていくためにそれ自体を環境の一部分として循環させ続けなければならないという発見がありました。

今回はまさにその「環境の循環」をキーワードとして、昨今のパンデミックが私たちにもたらしている圧力（プレッシャー）と重ね合わせながら、ACACの大きなギャラリ空間に強風を吹き込む「換気をする展覧会を開催します。

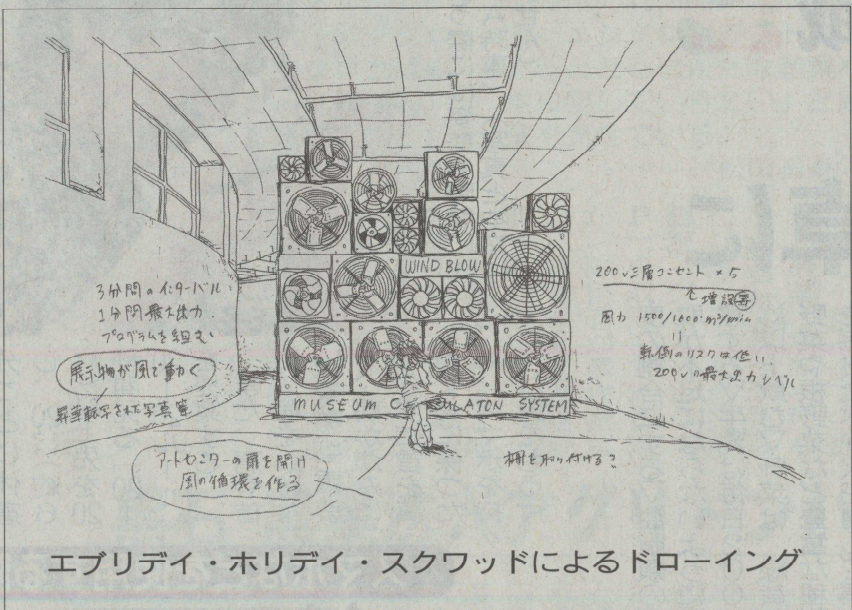
考えてみると、アートセンターを建てるという公共事業も新しい表現活動をこの地で展開させる社会的基盤づくりだと捉えられます。ACACは2021年12月に開館20周年を迎えますが、施設を維持し、よりよく運営していくためには、地域の生態系の一部として外からやってくる表現者たちを受け入れながら、この地で既に築き上げられてきた様々なものを活かして続けることが必要だったと言えるでしょう。アーティストたちのアプローチは、

昨今の状況や地域のアートセンターについてだけでなく、人間がつくり出してきた様々なシステムの今後のあり方を考えていく上でも、何かしらの気づきをもたらしてくれそうです。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員 慶野結香）

※第1金曜日掲載

ACACでは、4月24日よりアートチームSIDECORE（サイドコア）による、匿名アーティストグループ、エブリデイ・ホリデイ・スクワッド（EHS）の個展「アンダープレッシャー」を開催します。サイドコアはアーティストとキュレーターによって構成され、ストーリーアートを切り口に日本各地で展覧会やイベントを開催しています。サイドコアと共に活動するEHSも都市空間やルールに介入していく遊び心溢れた作品を制作しています。東北地方では、宮城県の牡鹿半島と石巻市街地で行われている「リボンアート・フェスティバル」に2017年、19年と参加し、



エブリデイ・ホリデイ・スクワッドによるドローイング